



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
総合病院 聖隷三方原病院
聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
静岡県浜松市北区三方原町3453
TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
編集者 横地健治

2017年3月1日

絵をかくこと

横地健治

国立科学博物館（東京上野）で「ラスコー展（クロマニヨン人が残した洞窟壁画）」が開かれており、私は昨年これを見てきました。これを見たのは2万年前のクロマニヨン人です。この人たちが絵をかくということは、今と比べてたら多大な労力を要します。暗い洞窟の中で火を焚き明るくし、絵の具を作り、足場を組んで高い所に絵をかくています。このことから、絵をかくことは人の根源的な欲求なのだと思います。

この人たちは、どんな絵をかくていたのでしょうか。まず、身のまわりにいる動物をかくています。これは、目に見える物を写し取ったものです（「写実」）。そうでない絵もかいています。それは「井戸の場面」と通称されているものです。槍が刺さり腹から腸がはみ出しているバイソン（大型の野生牛）のかたわらに、鳥のような頭部を持った人間が仰向けに腕を広げて横たわっています。その隣には、棒の先に止まった鳥と、折れた槍が描かれています。なお、横たわった人物の股間部から

直線の突起が出ています。この絵の意味については議論を呼んでいます。そのひとつとして、ミッシェル・ジュヴェ（睡眠研究者）の解釈が、最近読んだ「意識と脳」（ラタニスラス・ドウアンヌ著、高橋洋訳、紀伊國屋書店）の冒頭に書かれていました。鳥の顔の横たわった人物の股間の突起物は勃起したペニスである。睡眠のうちのレム（REM）睡眠期ではペニスは勃起する。この時期に夢を見る。鳥は、夢を見て飛び出す心を表す。よって、この絵は、夢見る人とその夢と解釈できる。鳥が飛び立つ魂を表すことは、エジプト神話・ヒンドゥー経典など普遍的に見られる。キリスト教のハトもこれに当たる。この解釈の正否は別として、クロマニヨン人が写実ではないものを絵にしていたことは確かです。目で見たものではなく、心のなかのイメージを具体的な形（絵）として定着させることに、人は根源的な欲求を持っているようです。

なり、身のまわりの人や物を描くわけではありません。写実的な絵をかくのは、小学生になってからです。初めは「なぐりがき」です。これは1歳半ぐらいから始まるとされています。最初は、ただ線をかいているだけで意味はないように見えます。2歳ぐらいになると、波・丸・渦巻のような形となり、本人はその形の意味を口ずさみながら、それをかくようになります。その絵の意味は本人の口述がなければ意味不明です。そして、2歳半ぐらいから、実際のもので対応するものをおかようになってきます。しかし、それは写実とはほど遠いものです。その代表が、3歳児がかく人の絵です。その絵では、頭部から手足が出ています。「頭足人」と言います。どうしてこんな絵になってしまったか。それは、3歳児には「胴体」という概念がないというところで理解されています。胴体は顎の延長として、顔に包括されていると思えば納得できます。子どもは身体概念をどんな順序で形成しているのかはよく分かっています。したが、胴体はかなり遅い時期に獲得されるので、なお、乳児期早期から相手と見つめ合うことはするので、眼

は最初に形成される身体概念ではないでしょうか。例えば、2カ月の子の心の中にある人とは、眼が二つあるものかもしれない。もし、そうならば、2カ月児と目と目を合わせないやり取りをしても意味がないということになります。こうしてみれば、身体概念の発達を理解は重症心身障害のコミュニケーションと無縁ではありません。

ラスコーの洞窟壁画には写真と言えぬものがあります。だが、子どもの描画の発達には写実は出てきません。人は視覚情報を言語概念で整理統合して、今見ているものを意識に上らせていると考えられます。人のかく絵とは、意識下に存在するものを、手を使って具体的な形に移すことです。一見写実と見えたものでも、カメラの写実とは違い、それをかく人の心を移しているのです。そして、それはやらすにはおられない本能のようなものだラスコーの洞窟壁画は教えています。

重症心身障害児（者）の多くは、絵をかくための十分な上肢機能を備えていません。しかし、心の中のを形あるものに移したい欲求は、その人なりに持っているはずで、限られた上肢機能あるい